

Title	Cynewulf's Elene試訳(その2)
Author(s)	金山, 崇
Citation	大阪外国語大学学報. 36 p.17-p.28
Issue Date	1976-03-01
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/80580">https://hdl.handle.net/11094/80580</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## Cynewulf's *Elene* 試訳（その二）

金 山 崇

### Cynewulf's *Elene*—a Translation (2)

Atsumu KANAYAMA

This is Part II of my attempt at translation begun a year ago of Cynewulf's *Elene*, an important Old English religious poem of the ninth century. The translation here offered represents Divisions iiii to vii in Gradon's Methuen Edition.

Among the books mentioned in the Bibliography I have found C.W. Kent's edition of the poem extremely helpful and illuminating, whose full glossary, for instance, is more than twice as large as that of the Methuen edition.

I hope that the translation of the rest of the poem will be completed during 1975-1976.

: iiii.

着くやかの女<sup>ひと</sup>命<sup>めい</sup>下し、此の町の人等、  
智慧極めたる人等、あまねく  
ユダヤが国の中一人余さず、  
凡そ真<sup>まこと</sup>の法もて神が秘蹟の最も深き処を  
何人にも劣らず説く力ある者、来り集いて  
議せんよう命ぜよ、と宣いぬ。

280

さても遠き国々より集いたるは、  
モーゼが律法を説く力持つ  
少なからざる人の群れ。その人等が内より  
三千の者、其処にて選ばれ  
進言する事とはなりぬ。かの美しき女性  
ヘブライが人等らに、言葉もて持ち掛けたり。

285

「神が書の内なる予言者等の  
神秘なる言葉<sup>ことば</sup>に依りて、  
そのかみそなた等、栄光が王に

290

嘉せられ、主に慈しまれ、又よく仕えし事、  
とくと承知せり。

げにそなた等、その栄光の力に依りて  
破滅より、火の責苦より、虜囚の身より  
そなた等を救わんと志せし人を

295

辱しめし時、愚かなり、その分別を  
棄て去りしなり。そなた等、  
かの人の面<sup>おもて</sup>に汚物吐きかけたり、  
その高価<sup>つばき</sup>なる唾もちて新しき光眼に取り戻し、  
盲目<sup>めしい</sup>を癒し、又穢れたる悪魔の霊より  
そなた等を救い給いし

300

人なるに！ そなた等、かの人を死罪に付せり、  
嘗て自ら人々が群れに入りて、  
そなた等が血縁の人等を死より醒し、  
元の命へ蘇らせし人なるに！

305

斯くてそなた等が心、盲目<sup>めしい</sup>となり、  
嘘と真実<sup>まこと</sup>を、光と闇を、

憎しみと愛を、取り違え、邪念もて  
誹謗を企みぬ。故に此の罰に、

そなた等、罪深き者は苦しみを受く。そなた等  
かの光輝ある権者を刑に処し、暗き思いもて  
過ちがうちに生き、今に至りぬ。

310

今疾く行き、智慧もて考え出せ、  
思慮に長け、弁舌秀れたる人等を、

資性優れ、そなた等が律法<sup>りつぽう</sup>

315

良く心に留め居り、我に  
真実<sup>まこと</sup>を語り、不思議なる事ひとつひとつにつきて  
我が尋ぬる処に、そなた等に代りてこれより  
明らかに答うる力持つ人等を。」と。

法<sup>り</sup>に長けし人士等、心樂まず立ち去りぬ。

320

怖ろしさに辛勞し、  
焦慮に心悲しみ、その女性<sup>ひょねん</sup>に求めらるる処を、  
善悪いずれにもまれ答えんものと、  
神秘なる言葉<sup>ことば</sup>に通ぜし人を

しきりに索めたり。 325  
さて彼等、自らの集える内に、  
ユダヤが民にある故事来歴、いと詳らかに  
知れる者千人を見出しぬ。  
彼等集いて群れ成し、帝が縁の者、  
黄金に飾られ、厳かに戦妃、 330  
威風堂々王座に待ちし処へと来りぬ。  
エレネ声挙げ、かの人士等に向いて宣いぬ。  
「聞き給え、智に秀れたる人等よ、  
聖なる秘蹟、言葉また智慧を。  
見よ、汝等、予言者等が教え受けて知れり、 335  
命の創り主、力統べる王、  
人の姿にて生れ給いしことわりを、  
モーゼ、イスラエルが護り主、この主につき歌いて、  
「ひそかに汝等に生まれん男子、  
力に榮え、その母、人の愛によりて 340  
子を孕みしにあらず。」と告げしことを。  
その王につき、賢き予言者、  
ソロモンの父、ダビデ王、雄々しき詩歌うたい、  
戦士等が君、斯く言えり。  
「我嘗て造物主、数多勝利の主を 345  
見たり。主、軍勢が統領、  
栄光が護り主、我が右手に  
見えたり。その時より、一度たりとも  
我が顔をそむけたることなし。」と。  
同じく後に予言者イザヤ、 350  
聖霊によりつらつら惟みて、  
人等が前に言葉もて宣いぬ。  
「我、若き後継ぎを育てぬ。  
子をもうけ、それに生命与え、  
聖なる心の慰めを与えたり。然れども 355  
彼等、我を侮り、怨意によりて憎み、  
遠きを見る目、智慧、を会得すること無かりき。  
隣れ、人に飼わるる四足、

日々追い立てられ、鞭打たるとも、  
飼葉与うる己が恩人に、些も意趣返さんとの心無し。 360  
然るにイスラエルが民等、如何に我  
此の世に在りしうち、彼等が為め、  
幾多の奇蹟行うも、此の我をつゆ認めざりき。」と。

.V.

見よ、聖なる書<sup>ふみ</sup>によりて我等知る、  
神、造物の主、汝等に、欠くる処なき栄光、 365  
豊かなる力を与え給い、モーゼに語りて、  
汝等天の王<sup>きさう</sup>に耳傾け、教えに従う  
べきこと、とされしことわりを。  
汝等疾くこれに倦み、  
此の眞実<sup>まこと</sup>に背き、かの輝ける人、 370  
造物の主、万物の王を却け、  
神の掟に逆らい、いっかな過ちを改むることなかりき。  
さて汝等、疾く赴き、今一度見出せ、  
古文書を、汝等の掟を、智慧の力もて最も良く  
知る者を、広く養いし心に依りてその者等、 375  
我に返答告ぐるを得んが為に。」と。  
誇り高き者等、心悲しく、  
女王の命ぜしまま、多勢連れ立ちて行き、  
智慧いと優れたる同族が者五百人を、  
聴くして、その学識最も深く、その 380  
心明敏なる者を見出し、  
選び出しぬ。彼等、此の町が守護者、  
暫くの後、再び広間に呼ばれぬ。  
女王、彼等に言葉もて  
語り掛け——一座を見渡したり——。 385  
「汝等、憐れなる放浪の者共、  
しばしば愚かなる行い為し、聖なる書<sup>ふみ</sup>  
を侮りたり。祖先が教えを侮ること  
今をおきて甚だしきはなし。  
汝等その盲目<sup>めいし</sup>癒す薬拒み、 390

汝等、ベツレヘムに主の御子、  
独り子なる王、諸王が華、の生れ給いし事の眞実を、  
正しき事なるを、肯んぜざりき。汝等、かの  
掟、予言者等が言葉、知ったりと雖も  
罪深き故に、そを、眞実を、認むるの心無かりき。」と。  
彼等これ聞き、心一つにして答えぬ。

395

「見よ、我等も、我等が曾祖のそのかみ  
神の約櫃で知りしヘブライが掟を学びいたり、  
して又、女王よ、何もて斯く  
我等にいたく、立腹せられしか  
合点のいかぬ節あり。我等又知らず、  
此の国にて我等の犯せし罪、  
あなたに対する大悪の罪、いささかも。」と。

400

エレネ宣い、人士が前に語り給いぬ。  
女性、声高く、齒に衣着せず、  
大勢を前に物申したり。「汝等今急ぎ行くべし、  
我が尋ぬる事に、一つ余さず、  
堂々、胸張りにて包み隠さず、

405

我に告げ得るよう、汝等のうちにて  
慧智、才幹、聡悟を最も備えし者を、広く探し出されよ。」と。  
そこで彼等、町々に威勢振り、  
力有つ女王が命の通り、会合の場去り、  
悲しみがうちにとくと思量し、

410

智恵しぼり、この女王の咎めし如き  
如何なる罪、帝に対し奉り彼等の民の犯せしか、  
心の内に求めたり。

415

其の折り、そこ人士面々居るうちに一人、  
故事に通じ、弁舌に長けたるユダなる名の者、  
語りぬ。「この女王の願い索むる処は、  
かの勝利の木なること我に明らかなり。

420

これ、其処にて世の諸人が支配者、  
無辜の身なれど苦しみ蒙け、  
神御自らが子、何の罪科無きに、  
我等が祖先、憎しみにより

遠き昔、高き木に架けぬ。 425  
 そは思うも恐ろしき事なりき。今いと肝腎なるは  
 我等が心を堅く不動のものと為し、  
 かの聖なる木、あの喧騒の後、何処に  
 隠されしか、かの殺害に就き  
 内報する如き輩にならざる事ぞ。 430  
 そは智慧の古文書、又父祖の教えの滅びるを  
 防がんが為なり。此の事知られなば、  
 それよりやがて日ならずして、  
 イスラエルが民、人々がその宗旨、  
 最早此の世に行われざる事とならん。 435  
 斯く、嘗て我が祖父——その名はサーキウスなりき——  
 勝利の誉高く、明敏なる賢才なりしが、  
 まさに此の事を我が父に、又  
 我が父は嗣子に語りぬ。  
 祖父、此の世を去らんとして斯く言えり。 440  
 「若し汝、世に生きて在るうちに  
 かの聖なる木、その上に  
 眞実の君、天の守護者、皆ての平和が御子  
 の架につけられ給いしかの木に就き  
 賢き尋ねあり、或は論議の生ずる事 445  
 あらば、汝、愛しき息子よ、  
 時移さず知らしめよ、死の汝を奪わぬうちに。  
 其の後は、ヘブライの民  
 思慮用いるとも、覇権保ちて  
 人々を支配する事、毫も能わざらん。 450  
 されど架につかれし君を、喜びに  
 心溢れて崇め讃うる人等の  
 栄光と力、永遠に生きん。」。

.vi.

そこで我、我が父に、律法に通ぜし人に  
 臆せず応じたり。 455  
 「若し我等が曾祖、かの人が

キリストにして、天国が王、  
造物主がまことの息、魂の救い主  
なる事、とく承知ならば、  
歪みし心よりかの人を捕え 460  
死に至らしめし事の如何で此の世に起こりしや。」と。  
其の折り我が父答えたり、  
心に分別備えし父言いぬ。  
『若者よ、神の至高の力を、  
救主が名を、会得せよ。そを何人と雖も 465  
口に出す事能わず、又此の世にて人、  
そを探し当つる事かなわず。  
我未だ嘗て此の民等の行いし評議に  
加わる心なく、常に身を  
それらが悪業より遠避け、我が魂に 470  
些も恥辱を加えたる事無し。  
我、長老達の車座をなして事を議し、  
心の裡にて、造物主が息、  
人々が擁護主、皆ての天使又人間が主、  
人の子の唯にもまして貴き御方を 475  
架につけんものと試みし折りも  
その不正に抗いぬ。憐れなる者共、  
斯くも愚かなるが故に、期せし如く  
かの御方に死を科すも、数多の苦しみもても  
迫害する事能わざりき、架に 480  
懸り給いてしばらくは、神の勝利の御子、  
息絶えさせ給いしこともありしが。  
それより後、天国の支配者、栄光の極み、  
十字架より降され、それより三晩が間、  
墳墓がうちに、暗闇の囚獄が下に 485  
滞り給い、三日目に、光の中の光、  
世の民等が君、生命得て蘇り、彼が僕等に  
勝利の真の主、生命に光り輝き、  
その身をば顕し給いぬ。それより  
暫くして汝が兄弟、浸礼が儀を、 490



光の信仰を受けたるなり。そこでステファーンヌス、  
 主への愛故に石もて打たれぬ。  
 彼、惡に報ゆるに惡を以てせず、  
 忍の心もてその怨敵の為めとりなし、  
 栄光の主<sup>きり</sup>に彼等が惡しき業、 495  
 サウルにけしかけられ、妬み故に、  
 何の罪科無きに己が生命を奪いしも、  
 その仇討つ事無きよう願いたり。サウル、  
 憎しみにより、非業の死に、  
 数多キリストの信徒を死刑に、処したりと雖も、 500  
 主、後彼に慈悲<sup>な</sup>かけ、彼、数多の人等に  
 慰めとはなりぬ。後に万物創成の神、  
 人等が救主、彼が名を変えさせ給いて  
 それより聖パウロ  
 と呼ばれぬ。又天穹の下、 505  
 律法の師達がうち、又女  
 或は男の産み出せし者がうち、  
 彼にまされる者、其の後いつの時も、他には無かりき、  
 彼、汝が兄弟ステファーンヌスを  
 山上にて石もて殺害せよ、と命ぜし者なれど。 510  
 さても汝、我が愛しき雄々し男よ、  
 我等主にしばしば罪犯し、  
 罪の傷手負わすとも、直ちに  
 その惡しき業の償い為し、  
 以後不正を思いとどまるならば、 515  
 万物の主の如何に慈悲深きか判るはず。  
 故にそれより、我と我が愛する父、  
 皆ての栄光の神、生命の主、  
 人間の切なる窮状故に、  
 忌わしき処罰蒙け給いし事を 520  
 信じたり。故に  
 最愛の息よ、我、汝を  
 慈き訓えにより教えん、汝、  
 神の御子に向け侮りの言葉

憎しみ又悪罵、腹立ちての返答ら、夢すまじき事ぞ。 525  
 これを守らば報われ、汝には、  
 永遠の生命、勝利の至高の報応、天国にて授けられん。』と。  
 斯く我が父、その昔、  
 我若き日に、言葉もて教え給いぬ、  
 真実の言葉もて諭し給いぬ——その名はシモンと言いぬ—— 530  
 悲しみに通じたるかの賢き人は。さて  
 我が考え、心の内を知らるるからには、  
 汝等、若し此の妃、かの木に就き我等に  
 尋ぬる時、それに就き告ぐるに最もふさわしと  
 思わるる処をしかと納得されたり。」と。 535  
 さて、彼が言に応えて、その時、  
 彼等が内にて最も慧敏なるもの、言葉もて言いぬ。  
 「我等嘗て此の国中で、只今の汝以外に  
 如何な人も他の士も、かかる秘事  
 に就き斯く告ぐる者を聞きし例なし。 540  
 汝、故事に長けし人よ、人等が群うちに  
 在りて質さるる時、信ずる処をば  
 為し給え。智慧が、慎重なる言辞が、  
 賢者の英知が、斯かる衆議の人等を  
 前にして天晴れなる応答 545  
 為さん者には欠くべからざるものなり。」と。

.vii.

陳弁盛んに、人等  
 或は此処に或は彼処に、方々で  
 評議あり、熟考又思い入れあり。  
 武者等、集会に固まりて来たり、伝令、 550  
 帝が使者等は呼ばわりぬ。「人等よ、  
 汝等衆議の決せし処、正しく説くべく、  
 この妃、汝等を広間へ招かるる。評定の場  
 にては、深慮が、心の智慧が必要ぞ。」と。  
 彼等、人々が守護者達、厳しき命に依り 550  
 招ぜられし折り、心悲しみて

覚悟したり。彼等、館に赴き、  
己が知識の程を知らしめたり。そこでかの妃、  
ヘブライが人等に、言葉もて呼びかけ、  
憐れなる者等に、かの古文書に就き尋ね、 560  
如何に、そのかみ、此の世にて予言者等、  
聖き霊もてる人等、神の御子に就きて歌い、  
又いずこにて、主、造物主が息、  
人等が魂愛されしが故に、受苦され給いしか、と問いたり。  
彼等頑固、情強く、石より堅くして、 565  
かの秘事、如何にしても正しく告ぐる心無く、  
かの妃の、彼等に尋ねし処に就き  
怨敵となりて、如何な返答も為さず、  
妃の尋ねし言葉一つ一つに、堅き信念もて  
反駁し、彼等の生涯がうちに、かかる 570  
類の事、今も昔も、毫も  
聞き及びたる事無し、と答えぬ。  
エレネ、声挙げ、怒りて彼等に応う。  
「我まことに汝等に申さん、而して  
生命あるうち、此の事の偽りなる事なからん。 575  
若し我が前に立つ汝等にして、人を欺き迷わせ、  
この偽りを更に重ねて犯すとせんか、  
山上にて火葬の火が、最も熱き烈火が、紅蓮の炎が  
汝等を焼き尽くし、汝等が肉体を滅し、  
かの虚偽故に汝等が罪問われ、死の裁き 580  
を受けん。汝等、今まで暫し、不正の心もて  
罪の懷に覆いて隠せし言葉の真実、証す事能わず。  
汝等かの事を包み、深き力を隠すことかなわず。」と。  
彼等、死を、火葬を、生命の終末を  
覚悟せり。斯くてその場で、弁舌巧みなる者一人を 585  
——その名ユダとして縁者がうちに知られたるが——  
を引き渡しぬ、彼等、此の男を妃に渡し、  
類い稀なる智者と称したり。「あなたの言葉もて質し給う処、  
真実を告げ、隠れたる事を、法を、彼、  
終始洩らさず明らかにする力あり。 590

彼、此の世にて高貴に生まれ、  
 弁舌に長じ、予言者が息、  
 評議に臆せず、生まれつきて  
 彼に賢き返答備わりてあり、  
 心が内に智慧を有つ。彼、あなたの心の望むまま、  
 衆数多居る前に、その大いなる力  
 に依り、智慧が賜物を披瀝せん。」と。  
 妃、皆それぞれを、事なく己が家路さし  
 帰らしめ、次いでユダ一人を  
 人質として留め置きぬ。やがて、  
 これまで久しきに亘り、その臥所に  
 隠されてあるかの十字架に就き教えよ、と  
 一心に請い、彼一人、人目を避けて呼び寄せぬ。  
 一人になりし男にエレネ、かの  
 栄光に輝く妃、宣いぬ。「汝に二つの事  
 用意されあるなり。生か死か、  
 汝の望むままぞ。今、時移さず告げよ、  
 此のうちいずれが道を汝よしとするやを。」と。  
 ユダ、妃に向かいて述べぬ——彼此の悲しみ  
 を避け得ず、妃が憎しみを外らす事能わざりき、  
 彼が死活、妃が手中に握られたるなり——。  
 「人、荒野に在りて、憐れ疲れ果て、喰うに食無く、  
 飢えに打ちひしがれ、荒野を歩くに、パンと石、  
 堅きと柔きと二つながら目に入りし折り、  
 飢え防がんと石探りてパンに目呉れず、  
 欠乏に赴きて食拒み、二つながら  
 己が自由に任されあるに、より望ましき物を侮る、  
 かかる事の如何でその人に起こり得んや。」と。

(未完) 1975. 9. 16.

#### 主たる参考文献

P.O.E. Gradon: Cynewulf's *Elene*, Methuen, 1966 (底本)

R.K. Gordon: Anglo-Saxon Poetry, Dent, 1964

C.W. Kennedy: Early English Christian Poetry, NY Oxford UP, 1968  
C.W. Kennedy: The Poems of Cynewulf, Peter Smith, 1949  
C.W. Kent: Elene, an Old English Poem, Ginn & Co., 1889  
G.P. Krapp: The Vercelli Book, Columbia UP, 1961